

60 初発時4度の脳血管撮影で動脈瘤が発見されず、14年後に再破裂して硬膜下血腫を伴った右中大脳動脈瘤の1治験例

伊藤美以子・黄木 正登・金城 利彦

公立置賜総合病院脳神経外科

症例は初回発作時34歳、再発作時47歳の男性。家族歴にくも膜下出血はない。喫煙、40本/日。

【初回発作】1991年6月、激しい頭痛で発症して近医脳神経外科に入院。CTでくも膜下出血が認められた。脳血管撮影を4度施行されたが出血源は明らかではなかった。ただし、3度目、4度目の脳血管撮影では右M1-M2移行部にわずかな膨隆が疑われるとカルテに記載されてあった。結局、手術施行されずに退院した。退院後のfollowは2ヵ月間のみであった。その後、なんら症状なく通常の仕事をしていた。

【再発作】2005年2月25日午後7時30分ころ、乗用車運転中に意識障害で発症して当院に搬送された。来院時、意識レベルは200、CTでくも膜下出血あり、右側頭葉の脳内血腫および右硬膜下血腫を伴っていた。3D-CTAで右M1M2分岐部に最大径20mmの大きな動脈瘤が認められた。強い左片麻痺を呈していたが、手術直前には意識レベル10まで回復。発症から5時間で手術施行した。術後経過は良好で神経症状なく退院した。1. くも膜下出血後のfollow upの間隔、期間について、および、2. 硬膜下血腫を伴った破裂脳動脈瘤の治療について考察した。

【結論】1. 出血源の明らかでない若年発症のくも膜下出血では定期的な画像検査を行なうべきである。2. 硬膜下血腫を伴った破裂脳動脈瘤では、手術適応があればただちに根治手術を行なうべきである。術前検査として3D-CTAが有用である。

61 急性硬膜下血腫で発症した前大脳動脈遠位部動脈瘤の1例

野下 展生・川村 強・藺藤 順

金山 重明

八戸市立市民病院脳神経外科

【はじめに】くも膜下出血や脳内出血を伴わない硬膜下血腫で発症した脳動脈瘤破裂は比較的まれで、前大脳動脈遠位部動脈瘤破裂によるものは過去に5例報告されている。今回、我々は急性硬膜下血腫で発症した前大脳動脈遠位部動脈瘤の1例を経験したので報告する。

症例は58歳、男性。突然の意識障害で発症。搬送時の意識はJCS 100, GCS 5 (E1V1M3)で、頭部CTにて左円蓋部および大脳半球間裂に急性硬膜下血腫を認めたため、緊急開頭血腫除去および外減圧術を施行した。発症6日後の脳血管撮影で左前大脳動脈遠位部(脳梁縁動脈分岐部)に不整形の動脈瘤を認めたため、発症9日目にneck clipping術を施行した。動脈瘤のneckでは壁も厚く動脈硬化性変化を認めており、真性の囊状動脈瘤を思われたが、動脈瘤のbodyはfalxと癒着し、壁は脆弱で二層構造となっており仮性動脈瘤を思わせる所見であった。大脳半球間裂の硬膜下血腫と動脈瘤には連続性があり、動脈瘤破裂が出血の原因と考えられた。

【結論】急性硬膜下血腫の原因として動脈瘤破裂が関与するケースが存在するため、非外傷性の急性硬膜下血腫については動脈瘤の存在を念頭に置いて治療を行う必要がある。

62 Orbital varixの1例

鈴木 健司・佐々木 修・中里 真二

矢島 直樹・平石 哲也・小池 哲雄

新潟市民病院脳神経外科

Orbital varixは脳外科診療上遭遇する機会は比較的少ないものと思われる。今回1手術例を経験したので報告する。

症例は50歳女性。H15.11月頃より頭囲を下げたときに左眼球突出、眼部痛、複視を自覚するようになる。近医眼科受診したが異常は認められず、